静かに進む危機がある

週のはじめに考える

時代を読む

善意の空回りと危険性

専修大学教授　山田（やまだ）　健太（けんた）

世の中は「善意」で回っていることが多い。首相が非業の死を遂げた同期議員を最高の形で弔いたいと思ったのも、自らの政治信条を実現するために親切で熱心な宗教団体の助けを借りるのも、悪意はなかったはずだ。しかし、「知らなかった」として自身の選択を正当化したり、責任がなかったかのように振る舞ったりするのは、政治家としての説明責任を放棄するものである。

なぜ国葬にしたのか、どうして旧統一教会と手を組んだのかを、一政治家として党・政府の最高責任者として正直に語ることから、民主主義は始まる。さらに言えば、なぜ国葬儀に「自衛隊葬＝軍葬」ともいうべき仕様を採用したのか、使用した楽曲に込めた意味は何だったのか。前首相が弔辞で示した山県有朋は、軍人勅諭や教育勅語の誕生に深く関わった、その生みの親ともいえる存在であり、それを知った上でも目指すべき政治家モデルだったのか。

前・現首相が故人の功績として挙げた、安全保障法制や特定秘密保護法は自民党の悲願ではあっただろうが、儀仗（ぎじょう）隊入場の軍靴の響きや軍人勅諭と重ねて考えるなら、単なる善意や無知と見過ごすことのできない重要な国の形を示すものだ。

◇◆◇

ジャーナリズム活動も善意の塊と言える。社会の不正義を暴かなくてはいけない、二度と悲惨な事故や事件を繰り返してはいけないと思い、読者・視聴者により正しく伝えようと被害者のもとに急ぐ。その結果、メディアスクラムと称される人権侵害のような事態が生じ、最近では被害者取材そのものが極悪非道の振る舞いとして批判の対象だ。ここでも「よかれ」と思った行動が、被害者のメンタルヘルスに関する無知などから、裏目に出ることが少なくなかったことになる。

円安などによる紙やインクの高騰で、新聞や雑誌、書籍は危機的なコスト高を抱えている。知識や情報が社会の必需品であるならば、生活を守るためのガソリン価格対策と同様に、民主主義を守る必要経費として公的補助があってもおかしくない事態である。しかし、読者の善意で支えられていた言論報道機関は、いまコスパに合わないと切り捨てられ、善意に基づく正当性の主張は単なる身勝手とみなされる時代だ。

◇◆◇

電力逼迫（ひっぱく）を回避するために原発を特別ルールで再稼働するのも、廃炉をスムーズに進めるために処理済みの汚染水を海洋放出するのも、北朝鮮や中国を仮想敵国として自衛隊を増強するのも、「唯一の選択肢」として辺野古新基地の建設を止めないことも、国家の安全や国民の幸せを考えた善意に違いない。しかし、その前提となるべき議論が秘密裏に行われたり、政治判断の美名でごまかされたり、さらに十分な議論もなかったりする場合が少なくない。

旅館業法の改正によってコロナ感染症の疑いで宿泊拒否が可能になることも、土地利用規制法の全面施行で重要施設の近くで監視が進むことも、生活の平穏を維持するために「よかれ」と思った政策に違いない。しかし、それがハンセン病患者の差別につながった過去や、公安調査庁や自衛隊などによる思想調査が続いている現実に目をつぶることで、善意の空回りを生むことになる。民主主義を守るためには、いったん「善意」を疑うことが必要な局面に来ている。

2022.10.16

「取材に協力できることは、世の中を少しでも良い方に近づけることだと思うので、希望を感じられてうれしいです」

最近、読者の方からもらってうれしかった言葉です。この方とは、「発言」宛てにいただいた投稿をきっかけに取材に伺い、出会いました。中学校の元教員で、生徒たちが新聞に触れる機会を持てるよう工夫してきたと言

夏の終わりが妙に長引いのうちにセミと秋の虫の鳴くような時季が過ぎました東京都練馬区の牧野記念庭ると、植物学者の牧野富太全国から採集した草木の茂たくさんのドングリが落ちた。都市で土の地面に散ら幸運です。たとえば東京新がある千代田区内幸町では周りの樹木のドングリは舗上で、当てもなく転がって

雨上がりの落ち葉とドングリ＝

国のために役立つようなことをしたい人の割合